

スウェーデン青年支援機関訪問調査報告

前田由美子 後藤さゆり 大森昭生

奥田雄一郎 呉 宣児 平岡さつき

はじめに

今回、スウェーデンの青年を対象とした教育プログラム、特に自立に向けた教育に関するそれについてインタビューをするために Leksand コミューンを訪れた。Leksand コミューンは首都 Stockholm の北に位置し、車で約 3 時間ほどのところで、スウェーデンの古い文化と美しい自然を残す小さな町である。年配のスウェーデン人にきくと、「Stockholm はいわゆるスウェーデンではない。Dalarna 地方(Leksand)こそがスウェーデンだ」という。この地方の人々は、古いものを使いやすく手を加えつつ現在に生かして暮らしている。

訪問先の高福祉政策の現場は、人々のかかわり方に温かみがあり、一人ひとりを大切にするという精神がしっかりと浸透しているように感じられた。人間をどうとらえるのか、人の一生を大切に考え支援するとはどうすることか、そうした視点で展開される取り組みには特徴的なものがあった。青年への支援は、人間の一生の一時期に対するものとして行われている。したがって、この時期のみ特別な支援が設けられるわけではなく、その前後期にもある継続した支援の一部分ということになる。

そうした一貫性のある自立支援（教育）自体が大変興味深いものであるので、ここでは必要に応じて青年期の前後の支援内容も含めて報告する。以下、インタビューは 2010 年 8 月 18 日午前 10 時から 2 時間ほど訪問施設において行ったものである。なお、施設設立の歴史などに関しては、スウェーデン青年クリニック組合のパンフレット『青年クリニック 簡潔な事業概要』から補足説明を加えた。

1. 調査施設について

1. 名称と構成

名称：Ungdomsmottagningen

コミュニオン（スウェーデンの基礎自治体）それぞれにある公的施設である。名称には「青少年」（*ungdom*）、「面会」「（医師の）診察」（*mottagning*）、「受けとめる」（*mottla[ga]*）、という意味がある。本報告では「青年クリニック」と表現する。青年期の身体的、心理的問題に医学、心理学、社会学的視点で対応する相談機関である。施設もそこでの専門家によるサービスも無料で利用できる。

パンフレットによれば、この施設はグスタヴ・フーグベリ小児科医師が中心となって、1970年にボーレンゲ（*Bolänge*）に設立されたのが始まりで、その意図は、身体的／精神的な悩みと、性についての悩みを一つにまとめて考える場を作ることであったという。やがて、同様の施設が各地に作られ、事業も広がり、国の資金が徐々に当てられるようになっていった。

スタッフ構成

- ・ 避妊薬の処方箋を出せる助産師（1～2名）
- ・ カウンセラーおよび／あるいは心理学者（1名）
- ・ 医師（1名）

基本的には、上記の3者がいることになっている。さらに、スタッフが男性、女性から構成されるように求められている。訪問先の施設では、医師が男性であった。

専門領域が医学、心理学ではあるが、社会的な知識を持ち合わせていることが重要であり、社会環境や家族問題にそれぞれスタッフが精通し、なおかつ3者が協力しあって青少年や地域の人々に対応している。

ここでは、医師と看護師は病院から派遣される形になっている。医師は勤務日数は少ない。カウンセラーはフルタイム勤務でコミュニオンに雇われており、公的機関による研修（自治体単位や国によるもの）などもあり、スキルを維持するためのサポート体制がしっかりしている。

施設の玄関に入ると、壁に4人のスタッフの写真と自筆のプロフィールが貼られている。それぞれ、家族構成や趣味、どんなことを考えて仕事をしているかなどを自由なスタイルで書いている。写真は趣味のボートをこいでいるところ、ホッケースタイル、大好きな犬と一緒にいるところなど、その人の持ち味や人間味が伝わってくるものとなっている。どのようなスタッフが対応してくれるのかがよくわかり、安心できるのと同時に、かかわろうという姿勢に温かさのようなものがある。仕事ではあるが、一人の同じ人間が対応しているというメッセージ、雰囲気がある。

カウンセラーについて

今回インタビューを受けてくれたのは、カウンセラーであり、施設長の **Irene Byström** 氏である。彼女は、月曜日から金曜日まで、午前8時から午後5時まで勤務している。カウンセラーとしては30年以上の経験をもつ女性である。温かく包み込んで、しっかり聴い

てくれるという印象の人である。

2. 施設の事業の目的と対象

目的

この施設のパンフレットによれば、事業の目的は「青少年の身体的かつ心理的健康の推奨、自我および性の発育促進、また望まない妊娠や性病の予防」であり、「若者が個人的な悩みを大人に簡単に相談ができる場所」として設けられている。また、両親や友人、恋人からの暴力や、アルコール、ドラッグの問題にも対応している。

今回の訪問先施設では、他の機関とは異なるものとして、さらにもう一つ別の事業が開かれている。それは、妊娠から出産、育児（子どもが思春期を経るまで）の期間、両親と子どもを支援するものである。今回の研究対象層とはずれるので、ここではふれないが、青年対象のみならず、自立して家庭を持つてからの時期、つまり子育て期までを継続的に支援しつづける事業が行われている。この事業は他の機関からも注目されており、訪問や問い合わせが多いということであった。この支援姿勢と事業展開は大変興味深い。ここでは、人間の人生を長い目でとらえ、「青年クリニック」の名にある時期だけでなく、その後も同じように手厚く支援し続けることが目的となっている。

対象（青年支援の対象）

パンフレットによれば、10代から23、25歳くらいまでの青年で、援助を必要とする全ての若者が対象となっている。また、さまざまな移民に対しては、宗教、文化的背景への十分な配慮がなされ、施設やサービスの利用においては、機能障害、性的指向への配慮もある。言葉・文化の問題や障害から利用できない人がでるといふことのないように考えられている。年齢の制限は施設によって異なる。今回の訪問先では、12、13歳から25歳までとしている。

3. 施設の内・外観と設備

施設の外観は一般的な住居と変わらない。町の中心街から少し歩いたところにある。日本で公的機関によく見る看板や門柱もなく、外から見ただけでは、公的施設とはわからない。それだけ、ドアをたたき易いし、利用しやすいことは容易に想像できる。病院のような建物では入りにくいであろうということで、ここでは特に「入りやすさ」を大切にしているということだった。しかし、コミュニーの住民はその施設についてはよく知っている。若い世代は、全員が知っているという。したがって、看板がないためにたどり着けないということはないという。理由は後ほど述べる。

施設内部の様子は、いわゆる（日本の）公的機関のそれとは全く異なっている。支援のコンセプトと関連していると思われるので、詳細に説明する。一般住宅の玄関と同じようなドアを開けると、待合空間（6畳程度の部屋）があり、小さなテーブルと椅子が数個置

いてある。この国に来て利用した施設のほとんどに明るい花、カーテン、ゆったりしたソファがあったように、ここのテーブルにも美しい花があり、明るいクロスがかけられていて、窓際には落ち着いた美しい柄のカーテンがかかり、鉢植えのグリーンがたくさんある。自宅のダイニングやリビングと同様の雰囲気をつくることで、利用しやすくなるからだという。また、たくさんの本やパンフレットが陳列できる棚があり、身体のこと、こころのこと、友だちや親とのことなど利用者の悩みに関連した書物（含パンフレット）が置いてある。パンフレットは種類もさまざまで、そこで読んだり、持ち帰ることもできる。さらに、この部屋には、キッチンもついていて、来訪者は暖かい飲み物をいれて飲んだり、テーブルにおいてあるクッキーを食べたりして待つことができる。

医師との面会室（12～14畳程度）には、デスクとその向かいに椅子が一つ、さらに数個の椅子、診察に使用するベッド、ゆったりとしたソファ、利用者たちの絵や文章の作品がたくさん張られたボードが数枚、本やパンフレットのたくさん置かれた棚がある。壁紙は明るい色調で落ち着いた模様のカーテンがかかっている。デスクで話を聴くだけでなく、ソファや、部屋の隅の椅子で聴くこともある。ソファには、等身大の布製の人形があった。腹部の洋服に窓のようなものがあり、身体の中の臓器や性的器官が細かく作られて入っている。医師の部屋でも、来訪者はそこにあるものは何でも自由に見たり触ったりできる。

2人の助産師の部屋は2階にあったが、父親サークルのリーダーとの打ち合わせがあり、当日は見られなかった。しかし、この部屋もくつろげる雰囲気になっているという話であった。

インタビューしたカウンセラーの部屋（医師の部屋と同程度の広さ）は1階の待合空間の隣にある。待合空間をはさんで医師の部屋と向かい側に位置している。彼女の部屋も同様で、日本の住宅の普通のリビングよりも明るく、広く、美しい。鉢植えのグリーンが窓際に数個あり、花とクッキーがテーブルに置かれている。カーテンは陽を通して、明るい。話す人はゆったりとしたソファに座る。ソファのサイドテーブルにはパンフレットや本がさりげなく置かれている。何より「利用のしやすさ」を一番大切にしており、人を緊張から解きほぐし、そこにいるスタッフを一人の人として信頼できるように工夫がなされている。

無料のパンフレットは、種類も多く、内容も充実している。身体の異変に対する医学的な情報や、こころの不安定状態に対する解説、悩み別の相談機関紹介が細かく載っている。問題への理解が可能になるだけでなく、仲間をどう助けたらいいかというアドバイスも得られる。そして、それらの多くのもので、一人で悩まずに誰かを頼っていい、相談していい、と呼びかけている。

2 事業の内容

1. 学校との連携

「生きるための知識」という授業がある。これは、基礎学校（日本の義務教育機関にあ

たる)から高校まであり、人間理解、他者とのかかわりかた、他者の尊重、民主主義、などまさに社会で生きていくために必要なことがらを教えている。その授業の一環として、当該施設との連携が図られている。しかし、連携の取り方には自治体や学校、さらには教師によって大きな違いがあり、かなり多様であるという。以下に紹介するのは、Byström氏の行っているものについてである。

対象が12、13歳からと、身体的な変化のおこる時期であるため、性的な問題やこころの問題、また他者との関係性の問題など、扱う問題の範囲は広く、人間にかかわる問題全般に及ぶ。また、深刻でデリケートな課題なので、施設のスタッフや施設そのものに親近感を持ってなければ、学び(連携)は成立しない。そこで、女子の6年生全員が施設を訪問し、丸一日を使って身体やこころの変化について学ぶことを行っている。パンフレットなどの小冊子はこの時、適当なものが全員に配布される。セクシュアリティや恋の問題や身体の説明のものが多い。男子は8年生からやっていたが、次の年度(2010年秋)からは、女子と同じ学年でスタートすることにしている。身体の変化など、あまり顕著にならないうちに、身体を含む全般的な問題が起こる前に(スタッフと)会っておく方がいいからだという。このように女子と男子が別々に学ぶ機会を設定している。対応するのは、施設のスタッフ3者である。この訪問で、場所と顔を知ってもらい、これから利用しやすくなるように組まれている。

連携の取り方に違いがあると述べたが、教師によるそれは特に大きい。担任教師によっては、必要性があると感じた時には何度もコンタクトを求めてくることもある。そして、生徒たちに話をする時間を設けている。時には同じ生徒たちに何度も話すこともあるという。逆に問題に関心の低い教師も中にはいる。教師の問題認識によって、連携の多寡はどうしても出てしまう。

高校生には、身体の基礎的な知識から始まり、内容をどんどん深めていく。15歳から18歳になると特に恋愛問題をかかえる子が増え、生きること自体がいやになるという声がかかるようになる。そこで、連携の回数も多くなる。週に1回ということもある。テーマは恋愛、避妊、中絶、親との関係、友だちとの関係、暴力、アルコール、ドラッグなどである。時には死の問題も取り上げる。17歳の少女の中絶とその後の生き方を取り上げた、実話のビデオを見て考え、話し合うことは必ず行う。

基礎学校から高校まで、基本的に授業では、ほぼ毎回「何が聞きたいか」を予め生徒たちにきき、そこからテーマを設定している。知識を教えるだけでなく、気持ちを言い合い、話し合いながら進める。それぞれの感じていることを大切にするためである。

2. 生徒たちの利用実態

施設の統計では、年間約4000人が利用している。男子の利用が女子ほど多くないというのは、どこの施設でも課題のようであるが、ここでは、医師がホッケーチームのドクターもしているということがあり、男子生徒が医師によく会いにくるという。どこか、ちよっ

と痛みがあると来る。そして、恋愛問題に話が及ぶこともある。

予約はしてもしなくてもよい。「drop in」というような、立ち寄ってただコーヒーを飲んでいただけということもある。待合空間で、「ただ顔を見に来ただけ」というので、一緒にコーヒーを飲んであげることもある。避妊具をもらいにのみ来ることもある。

毎日利用するケースもある。悩んでいること（たとえば、妊娠中絶）に自分で結論が出せず、こころの揺れを話しに来る。結論へのアドバイスを言えば簡単だが、自分で考えて決めることを大切にするので、考えることにつきあう。しばらくすると、悩む時期を経て、来なくなる。しかし、一度悩みを相談しに来ているので、成長してからも何かあればやってくる子が多い。

3. 守秘義務と信頼

基本的に利用者については、全て秘密が守られる。中には、子どものことで悩んでいる親が相談に来ることもある。親の話は聴くが、子どもが相談にきているかどうかは話さない。話した内容が親に知られないという安心感が、子どもたちとスタッフの信頼をつくる。もしその信頼が崩れたら、子どもたちはもう何も話さなくなるであろうし、適切な大人に何も相談できなくなる、話せるところが無くなるということを意味する。問題の多い青年期に信頼して話せる大人がいない、話せるところがないということは絶対に避けたいと考えられている。

ただ、問題が深刻で、このままではその子にとって大きな不利益になるという場合は、子どもの承諾を得て、親をよび、ともに話をするようにしている。中には、親をよぶことを拒否する子どももいるが、しばらくすると、問題がこじれたり、より悪い状況になり承諾する人が多い。18歳以上は「成人」であるので、本人との話しあいで問題解決を進める。すでに責任ある大人であるので、保護者の責任（対応）が求められることはない。

親をはじめとする大人の介入においては、子どもの気持ちを尊重しつつ、危険から守る姿勢がとられている。これはここで守ることが義務付けられている「子どもの権利条約」の精神であり、個人を尊重する精神の浸透した取り組みであることがよくわかる。

4. 学校以外の機関（専門家）との連携

外部機関とこの施設との連携はかなり充実している。Byström 氏いわくここが「Open House」のように、多くの専門家がよく集まり話し合いをもっている。ソーシャルワーカー、アルコール問題専門家、薬物問題専門家、心理学専門家、School Nurse、Family center の担当者、親などである。それぞれが必要な時に会って、問題をかかえる子どもについて話し合う。親とはその子どもの親である。全員が一堂に会することもあるが、それぞれ個別に臨機応変に会議をもっている。この連携があるため、問題解決の機能がうまくはたらく。小さな地域で連携がしっかり保たれている。これはどこの地域でも同様で、たとえば Stockholm ではこうしたクリニックが 20 か所あり、同じくうまく機能している。支援の質

と量がどこでも同じように確保されているのは、それぞれの施設長が月に一度集まる会議で、さまざまなことがら、特に重要なものとして **policy** が共有されているからである。

5. 利用を促進するための取り組み

出張講座のような形で、地域のイベントに参加し、コーディネートをするなどして、青年たちと会う機会をつくっている。

- ・自治体が企画した食事会やディスコが開催されるときに、前もって「生きていく上で大切なこと」をアンケート調査し、その結果を貼り出して、ワークショップを開催。
- ・教会のプログラムで、「若者会議」を開催。
恋愛について、身体についてなどをグループで話し合う。
愛についてのドラマを自分たちで作って、演劇にして地域の人に披露する。
- ・町のジム（ホールのようなところ）でイベントがあるとき、一人一枚自分の感情の絵を描く、という取り組み。その絵をのちに、図書館に貼り出す。

3. 学童期から成人後まで一貫した支援

「生きるための知識」という授業では、基礎学校の時期から、自立をめざした教育が行われる。人間という生き物についての生物学的な知識、家庭の営み方（家計、適切な栄養と料理と食事、掃除、健康増進と維持など）、他者とのかかわり方、自他の尊重、社会参加（民主主義）、そしてその延長上にある恋愛と夫婦になることと子どもを育てること、が基礎学校から高校までの間に教育される。「青年クリニック」は 10 代に入ったころから、こうした学びを支援し続けている。子どもたちは、身体的成長と精神的成長をずっと支え続けられることになる。何か問題をかかえたら一人で悩まなくていいと教えられ、実際に支援を受ける。そして、大人になる前から、子育てで悩んだら一人でかかえこまなくていい、親への支援にもさまざまあるということを知らされている。特に **Leksand** の場合は、青年期を経て親になっても、同じ場所で同じスタッフの支援が続く。大変に素晴らしい参考にするべき一貫性である。

Byström 氏によれば、自分に対して尊重の態度を示してくれる大人たち（教師や相談の専門家など）との触れ合いの中で育つ青年たちは、時間をかけて悩み、相談を利用し続け、自分や恋愛相手や子どもへの肯定的な感覚を育てているようである。そうした育ちの大切さを氏は強調していた。

おわりに

個人の尊重ということが社会の基本として長い年月をかけて浸透しているスウェーデンでは、子ども、青年への教育や支援の方法に根底から練り上げられた一貫したプログラム性が感じられ、その素晴らしさに感銘を覚えた。

ここに紹介したものは、得られた多くの情報の一部分である。今後は、他の資料や情報

をさらに分析、検討し、それらを参考に現在の状況に合ったプログラム開発に取り組んで行きたい。

最後に、貴重な仕事の時間を割いてインタビューに応じてくださり、またその前後の面倒なやりとりにも本当に温かい対応をしてくださった **Byström** 氏にこころより感謝したい。

資料

『青年クリニック 簡潔な事業概要』 FSUM スウェーデン青年クリニック組合

付記

本調査は、平成20年度科学研究費挑戦的萌芽研究（課題番号 21653086）：「『親になること』の今日的意義の再検討と青年期のための次世代教育プログラムの開発」（研究代表者：後藤さゆり）の助成を受けている。